

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさとルネサンス

第8号 (二〇〇七年一月)

廃墟に学ぶ

打田昇二

「猫に小判」、どんなに貴重なものでも価値観が違えば無用の長物となる。古代ギリシア芸術品で人類の至宝とまで言われる最大最高の傑作は、アテネの丘に聳えるパルテノン神殿を飾っていた破風大理石彫刻群である。これは「エルギンマーブル」と呼ばれ、大英博物館の目玉展示品になっているが別にギリシアからイギリスへ売り渡した訳ではない。

オリンピックでは各国選手団に先駆けて入場するが、ギリシアという国は紀元前にローマ帝国に滅ぼされてから二千年ぐらい国家が無かった。石造りの神殿は腐らないとしてもギリシアを支配していた国によっては皆にしたり火薬庫にしたり、壊して石垣の材料にしたり、さらには雷にも壊されて十八世紀頃は文字通り瓦礫の山になっていた。

その中に数多く埋もれていた見事な石彫のレリーフに目を着けたのは「エルギン卿」という称号を持つ伯爵でトルコ駐在英国大使のトーマス・ブルースである。ついでに言っておくが幕末の安政六年に、徳川幕府との間で日英通商条約(不平等条約)を結んだ外交政治家のジェームス・ブルースはエルギン卿の息子である。ま

たトルコ駐在大使なのにギリシアまで宝探しに来たのは、当時のギリシアがトルコ領だったからで他意はない。

トルコは遊牧部族の長であるオスマン・ベイが建国したイスラム国家であり、古代ギリシアの神殿彫刻などはビル解体現場の廃材程度にしか考えていなかった。しかし英国大使から廃墟の調査をしたいという申し入れを受けて遺跡の価値に気付く「調査だけ」という条件で許可を与えた。ところがエルギン卿は大勢の老夫を雇って廃墟を掻き回し、目ぼしい彫刻だけを取り出して船で英国へ運んだ。

現地ギリシアの住民たちはこの略奪行為に憤慨したのだが、占領者のトルコ政府が許可した調査という大義名分と大英帝国の大使の所業だからどうしようもない。一八〇〇年から三年間に亘って古代ギリシアの歴史が遺法に輸出され続けた。ただし掘り出しから輸送にかかった費用はエルギン卿が全額を負担したようなので個人的な盗掘になる。

石岡でも遺跡の保存体制が確立される前は金持ち連中が船塚山古墳とか国分寺跡などから出土品や礎石を運び出したり史跡を買い占めたりしたらしく、歴史の原点である龍神山までも捨ててしまったのだから英国貴族の所業を非難で

きる立場にはない。

ロンドンに到着した膨大な数の石彫は広場に並べられエルギン卿によって個人的な展示会が開かれた。海を渡ってきた珍しい彫刻類だから見物客が押し寄せると予想されたのだが市民の反応は冷たかったらしい。

入場料が高かった訳ではなく古代ローマの彫刻に馴染んでいた当時の人々には古代ギリシアの彫刻が理解出来なかったのだという。エルギン卿は困った。自分の石碑に転用するにしても数が多すぎる。悩んでいるときに英国政府が輸送費用の半額で買い取ろうと申し出た。それがエルギンマーブルである。

その数年後のことエーゲ海に点在するキラデス諸島のメロス島で春の陽光を浴びながら一人の農夫が畑を耕していた。畑のすぐ傍は紺碧のエーゲ海が光っている。振りおろした農夫の鍬先に力チリと音がして、大理石の塊が現れた。農夫は周辺にいた村人に応援を頼んでそれを掘り出した。一部が欠けているが石像らしかった。物識りが豊饒の女神アフロデーテであろうと言い出し、集まった村人が騒いでいる時にエーゲ海を浮上して航行中のフランス潜水艦が島の横を通りかかった。

艦橋から村人の集まりを見ていた物好きな艦長が島に上陸してきて「その石像を皆さんの希望する値段で買い取ろう」と申し出た。農夫たちも石像の価値は薄々感じていたが公式に届ければ占領者トルコの役人に取り上げられるに決まっている。少し高めの値段を付けたのだが大

金を持つたことがない田舎のおじさんたちだから程々の金額しか知らない。商談は成立して、石像は潜水艦でフランスへ運ばれた。それがルーブル美術館の看板娘？「ミロのビーナス」なのである。

エルギンマーブルとミロのビーナスが外国に持ち出されたことが契機となって、それまでは無価値と思われていた古代ギリシアの美術品というより、ギリシアの歴史や芸術に対しヨーロッパの人々が注目するようになってきた。一八三〇年、トルコの支配下にあったギリシア民衆が四百年ぶりに独立を勝ち取ることが出来た。考古学会も創設されて長い間埋もれていた「栄光のギリシア」が徐々に世界に知れ渡るようになるのである。

ビーナスのほつは筋違いながらもフランスが買い取ったことになるが、エルギンマーブルは英国が黙って無料で持ち出したことになるので現在でもギリシアとの間で「返せ！」「返さない」の論議があると聞いた。

さて、戦争に明け暮れる日々の中でオリンピックを始めたとか巨大な神殿を建てて多くの彫刻を後世に残したギリシアとは、紀元前七百年頃から各都市に興った小国家のことであり、それ以前のギリシアの歴史というのはクレタ島などに興ったアカイア人のミノア文明と呼ばれる初期青銅器文化である。これは紀元前三千年頃から千数百年続いたようだが火山の爆発で滅んだことになっている。

気象学などの研究では火山の被害ではないと

する意見もあるようで、実はバルカン半島からギリシアに侵入した幾つかの民族の一つのミケーネ人が、ミノア文明を破壊したのだという。噴火や地震はどこにでも有ったろうし異民族の侵入も当り前のことで、大きく考えれば青銅器文化から鉄器文化に切り替わりながら民族としてはアカイア人、ミケーネ人そして西方民族のドーリア人、イオニア人、アイオリス人などが現れたのである。

ミノア文明の幾分かはミケーネ文明に吸収されたらしいがドーリア人はへそ曲りだったらしく全ての既存文明を破壊した。このため各地に有力な都市国家が出来るまでの、つまり現在、一般にギリシア文明と呼ばれている石造りの神殿や人間に擬した神々の彫像が造られるようになる迄の七、八百年間は「ギリシアの暗黒時代」と呼ばれていて歴史が欠落しているらしいのである。

神様が国々を創生したとき、ギリシアを忘れていて、後から残りの土に虹の欠片を混ぜて間に合わせに造ったと言われる。現代でも国土が二千の島々からなり、人間が住めるのは百七十程度の島だと言われるギリシアは、観光地ではあるが生活環境が良くない。

極端な表現だが「貧困はギリシアの伴侶」という言葉がある。耕地が少なく広大な牧草地も無いのだから食料を始めとして資源に乏しいのは当り前、海に囲まれてはいるが諺にも「水清ければ魚棲まず」と言うからロマンチックなほど綺麗なエーゲ海に魚が豊富に泳いでいるとも

思えない。

そこで一旦はギリシアに侵入してきた民族も「とても住める土地ではない」と気付いて生きるための方策で海の向こうに新天地を求めるようになった。アナトリアと呼ばれた現在のトルコや南イタリア、そしてシチリア島などへ次々とギリシア系民族が移住して殖民地を広げた。一方、スパルタやアテネなどでは貧困にも負けず、飢えにも負けず、あくまでもギリシア本土に残ることを決意した連中が腹を空かせながら軍備を増強して強大な都市国家をつくり上げることになる。

クレタ島に興ったミノア文明などへの侵略破壊は初期の段階におけるギリシア系民族の殖民活動の一環に思えるが、トルコにしてもイタリアにしても先住民族が居た訳であり、土着していた勢力と殖民してきた勢力との間に永年に亘る衝突があつたことは想像できるのだが、先に述べたギリシアの暗黒時代に全ての歴史もまた闇に包まれていたのである。

紀元前の八百年代か七百年代かに、現在のトルコのギリシア系殖民都市に生まれたと思われる盲目の詩人ホメロスが居た。僅かに口承で残されたらしいミケーネ時代の神話を、この詩人は詳細に文字に記録していた。複数の作者という説もあるが、ともかく残された「イリアス」と「オデュッセイア」の二大叙事詩は優れた文学作品であると共に古代ギリシアを知る唯一の貴重な史料とされている。

「叙事詩イリアス」は、ミケーネの王様でギ

リシア軍の総指揮官として古代都市国家のトロイを攻めた英雄アガメノンや、アキレス腱で知られる武将アキレスの活躍を描いた作品であるが、二人ともギリシア神話に出てくる人物（神様）であるから、この話も神話の世界の出来事と思われていた。

ところが、この物語を現在のことと信じて疑わなかった人物がいたのである。それが一八二二年、ドイツ北部に牧師の子として生まれたハインリヒ・シュリーマンである。幼時にドイツ語のイリアスを読んでから、その面白さに魅せられ、ギリシア軍の攻撃で滅亡したトロイの城跡を発掘したいと思いついた。

やがて商人として成功したシュリーマンはギリシア語を学んで二大叙事詩全編を頭に叩き込み、商売で得た資金を抱えてトロイ発掘の機会を待っていた。その頃、ギリシア考古学協会もミケーネ遺跡を調査し始めたのだが資金が続かず事業が中断していた。シュリーマンは、ギリシア考古学協会の立会いのもとに自費での発掘調査を提案して許可を得た。

シュリーマンは一八七〇年からトロイの発掘に着手し、以後、生涯に亘ってギリシア神話の世界に属する遺跡の発掘を続けてエーゲ海文明研究の基礎を築いたと言われる。

「トロイの木馬」で知られた古代都市国家の遺跡はヨーロッパとアジアとを分けるダーダネルス海峡の近くにある。古代には海峡に面していたかも知れない。エーゲ海文明の初期からアレキサンダー時代、ローマ時代まで盛衰を繰り返した九つの層があり、その中の第六層が第七層がホメロスの叙事詩の時代と推定されている。各層からは青銅器、鉄器、銀製品が出土しギリシア考古学協会に収められたのであるが第二層から出土した「プリアモスの財宝」と呼ばれる黄金の装身具を見たときシュリーマンも一人の盗掘者となってしまった。鉢巻のように額を飾り両肩に垂れる部分と、首に掛けて胸元まで垂らす幾筋もの輪からなる見事な純金製品は密かにアテネにあった邸宅に持ちこまれ、やがてドイツへ持ち出された。

シュリーマンの夫人はソフィアと言った。この女性が豪華なプリアモスの財宝を身に着けた写真が残されているが、どういふ経過を辿ったのか、この宝は第二次大戦まではベルリンの博物館に収蔵されていたらしい。

平成八年（一九九六）五月五日の夜、NHKが「トロイの秘宝を追え」というスペシャル番組を放送した。第二次大戦でベルリンが陥落してから行方不明になっていた「プリアモスの財宝」が五十年ぶりに現れた」という内容で、シュリーマンの発見からモスクワでの展示に至る秘宝のドキュメンタリーである。

秘宝はモスクワのプーシキン美術館に保管されていたらしく「五十年経ったからもう良からう」と、ロシア政府が公表したようだ。何十年経とうとシュリーマンが盗掘したものに変わりはないのだが、ベルリン侵攻に際してソビエト軍が奪い、モスクワに送って美術館の地下に隠しておいたのか。

モスクワでは、所蔵絵画六万点を誇る国立トレチャコフ美術館が有名で、プーシキン美術館は芸術を学ぶ学生のためにレプリカを集めた美術研究所が前身である。レプリカと一緒に誰も秘宝を本物とは思わないから隠し場所には最適であったろう。

プーシキン美術館も最近では本物を集めるようになって日本でも展覧会が開かれレンブラント、ルーベンス、ルノワール、モネなどの作品が公開されたようであるがトロイの秘宝は持つて来なかった。プーシキン美術館でも特別室に置いて厳重な容器に収め写真撮影を禁止していた。黙って持つてきたものだから北方四島並みにギリシアかトルコに返還要求されることを恐れたのであろう。

叙事詩イリアスに傾倒したシュリーマンも幻惑された「プリアモスの財宝」は、造られたのがギリシア神話の時代だから紀元前千二百年か或いはそれ以前と考えられている素晴らしい黄金製品である。一見に値いするがロシアに行かなければ見ることは出来ない。

エルギンマーブル、ミロのビーナスそしてプリアモスの財宝も、現存する場所が本来の「有るべき場所」ではない。それどころか、エジプト文明やらメソポタミア文明などから出土した貴重な歴史的遺産が、大英博物館やルーブル美術館以外にも全く関係のない国の博物館に堂々と展示されている。

愛と裁きを根底に据えて人の道を説くカトリックの総本山バチカン宮殿の前にもエチオピア

から持ち出したオベリスクが置いてあるそうだから、ストレイシーブに譬えられる人間が古代の遺物を欲しがるのも無理はない。尤もエチオピアにはシバの女王伝説があり、片方のオベリスクが残る古都アクスムには映画で有名になった「失われたアーク（モーゼの十戒を収めた聖なる櫃）」があるとされているので、パチカソとの繋がりが無い訳ではないのだが：持ち出しはいけない。

異国にある歴史的遺産は古代文明の興った地域が国家として衰退し、支配関係が生じて持ち出されたものと推定は出来るが、出土品はあくまでも文明の興った場所に置かれるべきであろうと考える。

日本にも古代オリエント博物館があつて、かの「ハンムラビの法典」のレプリカが置かれていると聞いた。律儀な日本らしいが他国もレプリカで我慢して、本物は速やかに返還するのが筋ではなからうか。

同じ民族ながら中国が台湾を敵視している原因の一つは、かつて紫禁城内に有った王朝の宝物を蒋介石總統がそっくり台湾に持って来たからだと私は思っている。台北市内に故宮博物館があり展示しきれずに毎年、展示品を変えているのに、同じく故宮博物館を名乗る北京の紫禁城には建物しか残っていない。頑丈な檻だけ有つて中に猛獣の居ない動物園のようなものだから腹が立つのである。

他国を侵略し或いは他国を支配した権力は全ての事柄を自国流に変えさせるが、稀には反抗

しない限り自治を許す場合もある。先ず変えさせられるのは宗教だが、融通が利かないと思われる宗教でも支配地に異教を容認している例も多い。敗者の文化や異教を認めない場合は彫刻石像の類いを、壊すのも大変だと思われるまで徹底的に破壊する。

アレキサンダー大王は、ペルシア（イラン）に攻め込んで先祖が苦しめられたアケメネス王朝を倒したのだがペルシアの文化、つまり伝統的な古代オリエントの文化を否定する意図は無かつたと言われる。しかし遠征軍には軍人だけでなく官吏、商人、技術者から遊女まで加わっていたらしく、結局、ギリシアの文化がペルシアの文化にとって変わることになってしまった。ガンダーラに仏教美術などが興るのもその影響である。

ペルセポリス（王宮）は紀元前三三一年に占領したアレキサンダーが壊したとされるが実はアレキサンダーと一緒に悪酔いした遊女が松明を持って歩き回り、内部木造部分に火がついて全焼したのが原因で壊れたらしい。

石像や彫刻なども残されているからギリシア軍は占領地から持ち出すことはしなかつたようだ。持ち出しに価するものが無かつた訳ではなく、ギリシア人の芸術的感覚に合わなかつたから廃墟のまま残されたのである。

貴重な歴史的遺産を持ち出され続けたギリシア人にしてみれば前倒して「江戸の仇を長崎で討つ」チャンスを失つたことになるが、古代オリエントの文化など、エルギンマーブルの初め

の評価と同じだったのである。

「猫に小判」となるか「猫に鯉節」となるか、貴重な歴史的遺産も盗み食いする相手によって博物館へ行くか石垣の材料にされる。

八歳の師 言の葉 心映え 鈴木真紀子

毎年 書物も含めたくさんの人に出逢い多くの言の葉を見聞きます。その人の言の葉と人格が一致している時もあれば違つ時もあります。書かれた内容と本人から発するものの落差に驚くこともあります。事柄や対象によつてもまた気分によつてもそれは違つような気がしますが、自分でもしよつちゆう一致不一致があるのですから 他者を勝手に判断するのはあまり品が良いとは言えませんが 人間とは不思議なもので 誰かの言の葉を聞いた瞬間に そのことば（声色も多に関係がありますね）でその人を判断してしまつようです。分析したことを口に出すか出さないかは別として・・・それ以降はその分析がフィルターになつて更なる分析を構築したり人の批評をくつつけたり あるいは逆に想像だにしなかつた面を発見して土台から変更することもあつてでしょう。そうやって個々の対象の人間像が立ち上がつていくんでしようね。太古の昔には 弱いものが敵味方を判別し生き残るための原初的な知恵の一つであり 研ぎ澄まされた感覚の一つだったんでしようね。今はそれに その人の心映えが見え隠れしてい

るようにも思います。

石岡で出逢った人の中で 私が最も感銘を受けたのが八歳の少女（Aちゃん）の言の葉と心映えていた。私はAちゃんの精神レベルの高さと揺らがない胆力に驚くとともに Aちゃんから学ぶ為にここに配属されたのかもしれないとさえ思いました。

私がある小学校でお手伝いをさせてもらっていた時のことです。給食の時B君が「去年ねじいちゃんが死んだの。それでね すぐ後にお父さんも交通事故で死んじゃった・・」と泣きそうな顔でつぶやきました。すると隣りの席のAちゃんがB君の顔をまっすぐに見て「B君それまでお父さんからいっぱい幸せもらったんだよね！」と優しく言ったのです。B君はぎょんととして「そうかなあ？」としばらく思いつすように上を向いていましたが その後「そうだね！」と輝く笑顔を返してくれたのです。そんな発想ができるAちゃんを私はしばらく不思議な感慨をもって見つめていました。

Aちゃんはどちらかというとslow learnerで目立たない存在でしたが 彼女がいると周りがほんのり温かくなるのです。ある時も なかなか集中力が持続しないC君が「あゝまたおくれちゃった。あゝもうだめだ。またお残りで外遊びができない。もう五分しかないのにこんなに残ってる。もうできないよ」としきりに時計を気にしてきよるきよるしています。そんな時Aちゃんは自分の方がC君より遅れているのに

「C君大丈夫だよ、もうほらそんなに終わってる。頑張ればできるよ！この前だつてできたじゃない。大丈夫 最後までがんばろ！」と心の底から励ましているんです。しばらくして当のC君は休み時間に少しは食い込みましたが Aちゃんより早く終わつてさっさと運動場へ走っていききました。そんなC君に「よかつたね終わつて！」と笑顔を向けたあと Aちゃんは何事もなかったかのようにひとりですつとプリントの計算をしていました。

掃除のときのことです。その学校は掃除当番が縦割りになっていて6年が班長5年が副班長です。Aちゃんの班には同じクラスのD君がいます。彼はとつてもやんちゃで隙あらばさぼつてやるつと いたずらつこ特有のリスのような目をくるくるさせています。面倒くさいことは大嫌い 好きな体育などは終了チャイムが鳴つてもやつていたい。宿題は誰かのをうつしてちゃつちやつと終わらせればOKという およそAちゃんとは逆のタイプの少年でした。例によつてさぼつて逃げ回つてっていると班長が「お前 そんなことしてると中学に行つたらいじめられるぞ。やるときはちゃんとやらなきゃなめなんだ。仕事がちんとできない奴は勉強もできないんだぞ。おまえテストで80点以上とつたことあるのかよ！」と詰め寄りました。ドスのきいた声ではないですが 筋は通つているし当たつてはいるしで D君が返答もできなくて小さくなつてみると Aちゃんが「D君 80点以上とつたことあるよね。100点だつてとつたこと

あるよね！」とやさしく しかし毅然と言いながらD君の方に近づいていきました。班長と副班長はAちゃんの態度に何もことばがありませんでした。その後D君はすこすこと掃除をはじめたのでした。

満点の三〇点

白井啓治

自分に自慢の出来るところを一つ挙げる、と言われたら何を挙げるだろうか、と突然に思いつき考えてみた。

これはなかなか難しい問いである。

四十年間、脚本家として文章を書き家族を養つてきたが、自慢できる文章かといえはそうではない。むしろ恥ずかしくなる。しかし、休筆宣言するまでの四十年間それを買ってくれた人がいたのだから、箸にも棒にもかからない、といつわけではないのだろう。だが、自慢となると話は別だ。

自慢を頭に置いて四十年間を振り返つてみると、自分の何が良かったのかなと思われたい。一時期は業界のモンスターと言われるほど書き殴つた事もあつたが、よく耐えられたなという感慨もなくはない。

困つたときの白井ちゃん頼り、と言われたこともあつたが、それほどの博識ではない。むしろその逆である。しかし、博識のもとに依頼された仕事をスラスラと書きこなしていたら、直ぐに捨てられてしまったらどうな、という気も

している。作家を生業とするなら余り博識でない方がいいのかもしれない。脚本を買いに来る人達は、どうやら手なりで仕事をされるのが嫌な人種のようなのだ。

脚本を書くというのは、見えない相手に腕力を振るうようなものだから、博識ではダメなのかもしれない。というより、博識である必要はないのである。どうやら脚本家というものは小さな知識を大きな知恵に腕力で創りかえるという作業のような気がする。そんなことを言うと同業者からクレームをもらいそうであるが、たくさんの知識を必要としない職業なのかもしれない。

知識で思い出されたのであるが、小学、中学、高校、大学での勉強というのが大層嫌いで、成績は最低なものだった。おかげで大学へは二つ行ったのであるが何れも途中でやめてしまった。

小学校はそうでもなかったと思うが、中学・高校の成績は酷いものだった。テストの成績など三〇点、四〇点が普通であった。それで良く卒業が出来たものだといまだに不思議に思う。しかし、その当時のテストに正解した三〇点は、いまだに一〇〇%覚えていて、満点の三〇点なのだ。これはもしかしたら私の自慢の一つに挙げても良いのではないだろうか。

テストの度に一〇〇点を取った成績優秀な人でも、その時の点数を一〇〇%覚えている人は少ないだろう。もしかすると今では、同じテストをしたら三〇点も取れない人がいるのではないだろうか。

成績三〇点の知識が、満点とは言わないが本では合格点の知恵を生み出すのだから、小さな知識で大きな知恵を生み出す腕力を鍛える方が大切なかもしれない。

次にあなたの自慢はなんですか、という問いがあったら、私の自慢は満点の三〇点ですとこたえることにしよう。

さて、昨年十二月十六日に小林幸枝さんと旗揚げした「ことば座」という劇団の旅立ちのためのプレ公演を行った。自分の中では一度切り捨てた演劇ではあったが、小林幸枝という不思議なスケール感をもった人に出会って、生涯的に休筆・休職宣言をしたはずだったが、最後の仕事をしてみようかという気持ちにさせられ、二人だけの劇団を設立したのだった。

私が演劇の世界に足を踏み入れたのは、もう四十年も前のことである。新劇と呼ばれる世界に足を踏み入れたのであったが、エンターテインメント性を全く無視した、独り善がりの、そして多くの者が共産党に染まったところであった。(誤解のないため付しておくが、私はどちらかというところ共産主義的な思考が強いが、党的志向は全くない。だから党的な思考で共産主義を語るのが大嫌いなのだ)

そこで良く言われたのが、お前はそんな商業主義に毒された志向で新劇を語るなであった。しかし、舞台の場というのは貴族社会的で非常に贅沢で金のかかるものである。一公演行っただけに多額の借金を背負い、その補填に全員が肉

体労働を強いられる。それで口をついて出るのは、我々を理解できるものだけが観に来てくれればいい。我々は高邁な精神のもとに崇高な芸術を行っているのだから、であった。

しかし、貧相な舞台造りの中で行われるマスターベーションを誰が金を払って観にくるだろうか。あばら骨の浮いて見える胸に乾し葡萄が乗っかっているようなストリップショーを観に来る者はいる筈もないのだ。

如何にサルトルだ、イオネスコだ、ベケットだと手前勝手な議論を仲間内に戦わせても、貧相な夢も希望もない舞台を観に来る者のいるはずもない。人間にとつて夢や希望は贅沢なものなのだからそんな貧相で生活苦のにじみ出た舞台上に素的を感じてくれるわけがない。贅沢な素的を創れないところはもう御免だと映画の世界に転向したのであった。

しかし、舞台の贅沢な素敵という魅力は捨てたことはなかったし、機会があればと思っただけだが、その思いを実現することはなかった。自分の中に、舞台表現をしてみたいという必然も生まれなかった。

勿論、仕事として依頼のあったものは、職業として演出家の看板を掲げている以上、断ることなく、ええッ? という中身の芝居でも、シヨ一の演出でも何でもこなしてきた。しかし、自分自身のやりたいと思う舞台の必然も生まれなかった。商売としての舞台演出はやったが、自己表現としての舞台という場も、その機会もつくろうとはしなかったのだった。

しかし、人生とは不思議なもので、無欲になつて、もう仕事は止めだ、と決め込んだ矢先に自分自身の表現の必然に出会ってしまったのである。

まだ俳優とまではいえないが、一緒に劇団を始めた小林幸枝さんは、私という演出家にとつて目に付いてならない不思議なスケール感を持つた人である。今はまだ技術的には多くの問題を抱えているが、そのスケール感は、そのままプロとして通用する魅力を持っている。

個人的な趣味の問題ではあるが、彼女にこんな物語を演じさせてみると面白いな、と脚本家の内面に訴えてくる雰囲気を感じさせるものがあることがいい。実際に大成するかどうかは今後の問題ではあるが、こちらに物語を書いてみようかという気持ちにさせるところが、プロとして立てる才能の一部なのだろうと視ている。

ことば座は、ギター文化館を発信の拠点として、この二月に旗揚げ、旅立ち公演を行い、年5、6回の公演を計画しており、すでに5回の公演日程も決まっている。俳優は観客が育てるという側面があることから、是非、応援していただけることを願っている。

ことば座がギター文化館を拠点として公演を行っていくことは、昨年十月に決まったのであったが、ギター文化館周辺の雑木林が気に入った私は、打ち合わせを理由に、小林さんと何度か足を運び、近くにこの辺では珍しく、なかなか美味い店も見つけた。(折角だからお店の名を紹介しておきましょう。「ふらの」というお店

で、なかなか美味しいヌードルを食べさせてくれます。但し、注文して直ぐに出てくることを望まれる人には不向きである)

ギター文化館に通い、木下館長と話をすることで、妙なところで意見が合つて、共通に腹を立てた。

腹を立てた内容とは「石岡に限ったことではないが、地方の文化を大切に据えている地域ほど、文化をタダ扱いにしている」ということであつた。因みに文化とは、人間の理想を現実にしていく精神活動のことをいうのであるが、所謂、人間の精神生活にかかわるもののことを文化というのである。この定義からすると、文化とは物品のように金銭の尺度で測れるものではないことになる。

そのところが二人の腹を立てる要因になっているのだが、どうやら行政というのはそのことを楯に、文化をタダにしてしまおうとしているようなふしがある。そのためかどうか分らないが、文化事業には予算がつかない。たまたに予算がついてもそれらの多くは、およそ使い物にならない箱ものである。多目的という名のもとに作られた箱もので、果してどんな文化を展開させようというのだろうか。

町の文化サークルが、カラオケ的自己満足を披露する場としてなら使い道があるが、それ以上のことをやるうとすると、実に使い勝手の悪い箱ものなのだ。

カラオケ的自己満足の披露なのだから当然入場料など取れない。それが発展して、文化は

タダだ、という考えを浸透させようとしているのではないだろうか、とさえ疑つてしまいたくなる。実際、そのような側面のあることは否定できないだろうと思う。

そのことへの反発を唱えるつもりはないが、ギター文化館でのことば座の公演は、最終的に八十名全席指定で5千円の入場料で打ちたいと考えている。小林さんにもそのことは伝えてあるし、それだけの舞台を創ってもらわないとならない。

そんな料金で人が入るはずない、という人は大勢いるだろう。しかし、私はそう思う人達は五〇〇円の入場料金でも、演劇を観にいこうとは思わない人たちだから、相手にしようとは思っていない。

ふるさととして大いに自慢の出来る風景の中に建つ館の中で、風景の自慢を捨てるようなこととはしたくない、と思つている。確りと風景に對峙した、良質なふるさとを自慢する物語の表現を創造すれば、人は全国から来ると考えているし、それがプロの表現集団としての「ことば座」の存在する意味だとも考えている。これはもしかしたら満点の三〇点男だから考え、言える事なのかも知れない。

正直いうと、五千円というのは、実は一万円を下方修正したもので、大風呂敷を広げたには姑息だな、という思いのあることは否めない。そんなことを話しながら、大笑いした年も終わり、今は、満点の三〇点頭で、今年の希望を紡いでいる。

十二月二十八日、空のまだ明るんでくる前の早朝のことです。

愛犬ナナちゃんのトイレで外に出たとき、笑われるかもしれないけれど、生まれて初めて流れ星を見たのでした。

外は最高に寒い時間で、ナナちゃんの孫にあたる子犬のアルちゃんとリールちゃんを暖房代わりに抱いて、ナナちゃんのトイレが終わるのを待ちながら、夜空の星を眺めていました。

「流れ星をみたいな」

そう思った瞬間に、星と星の間を鋭利なナイフで切り裂くように、スーッとプラチナ色の線が引かれたのでした。

プラチナの線は一瞬にして消えてなくなりましたが、その一瞬の間に私は確かに運を願ったように思った。

私は今まで、

「運が来ないなあ、運が来ないのは流れ星を見てないからかな？」

なんて思っていました。演劇を始めて、人間には運・不運はない。運も不運も自分が創るものだって言われて、そうかなあ、と書いていました。初めて流れ星を見て、そうだ、運は自分が創るのだということがハッキリ分かったような気がしました。

一瞬に消えてしまうプラチナの光りに、私の欲張りな願い事などいえるはずありません。逆に、流れ星が私に「運は自分で創れ！」って

言うてくれたように思っていました。

そうだ、運は自分で創るんだ、と思いながら星空を見上げていたら、自分がドンドン銀河の世界に吸い込まれていくような気持ちになりました。そして、銀河の中にはたくさんのプラチナの線が縦横無尽に、リズムをつけて流れていました。こんなにたくさんの流れ星があると、どの流れ星に願いを言ったらよいのか分からなくなってしまう。そして、やっぱり運は自分で創るんだ、と思うことが出来ました。

そうしたら、霞ヶ浦の紅い鯨に書かれている幸せの赤い星が大きく輝いて見えました。

「よし！ 来年は大きな運を創るぞ！」

思わずそう心に大きく言い聞かせたのでした。ちよつと寒くなって、

「ナナちゃんのトイレは長いね」

とアルちゃんとリールちゃんをグリグリ撫でながら、もう一度夜空を見上げていたら、

「こんなにたくさんの星を眺められる石岡って何て素晴らしいところなんだ」

と思うことが出来ました。たまに東京に出かけて夜空を見ても、プラチナ色の星はありません。

私はまた銀河の中に迷い込んでしまいました。周りは全部プラチナの光りです。空に、こんなにたくさんさんの星があることを、はじめて知ったのでした。

銀河の中で、こんなにたくさんさんの星があるのだから、一つぐらいポケットに隠して持ち帰りたいな、と書いてしまいました。

風は冷たく透明なガラス。澄み渡った空には無数のプラチナの光り。これが私の住んでいる、暮らしている町。運をしつかり紡げる町。

二月に行う「ことば座」の旗揚げ公演で、常世の国の恋物語第一話「恋瀬川物語」の台詞に、
「私は、ふるさとを捨てない。…（中略）…私は常世の国の女だから」という部分があります。星空を眺めている今の私は、この言葉を台本の言葉でなく、自分の言葉として言えると思えてきました。

ナナちゃんは、まだ戻ってきません。

もう一度星空を眺めていたら、宇宙空間を漂っているような気持ちになってきました。飽きずに眺めていたら、二〇〇七年の運が確実に創れ、紡がれてきたような気持ちになりました。そうしたら何故か、もうすぐ終わる二〇〇六年にむかって、

「ありがとう」

という言葉を呟いたのでした。

鈴の宮のおたふくちゃん 兼平ちえこ

明けましておめでとございませう。

お健やかに新年をお迎えの事と存じます。

昨年は、幼い命が次から次と奪われ、悲しくって、心痛む事件、事故が多い一年でした。そんな悲しみの中にも、待ちに待った命のご誕生が、日本全国に明るい希望の灯りをもたらしてくれました。どこの国でも子供の笑顔は、勇気

と、ほのぼのとした優しい心をなげかけてくれます。

鈴の宮のおたふくちゃんは、そんな笑顔を忘れてしまった、ふるさとルネサンス塾卒業の大湖千恵作の八歳の女の子のお話です。

お話しの場所は、鈴の宮稲荷神社、石岡駅から徒歩で五分位のところです。元の西友ビルの前に入り、少し上り坂のカーブを過ぎ、丁字路を、右側に折れると金丸通りになります。石岡プラザホテルを左側に見ながら、間もなく右側の広場のある、少し奥まったところにあります。狐さんがある時は厳しく、ある時は優しく迎えてくれます。

神社の歴史は、常陸国の国府（西暦六四六年常陸国誕生）が置かれた時代、官人（役人）の交通往来の時に、駅使（駅に用意された馬「駅馬」といふ）、うまや「駅家」の利用を許された人が、鈴（駅鈴といふ）を鳴らして通行しました（駅制といふ）。駅制が廃絶した後、この駅鈴を神社に奉祀し、その神社を鈴の宮といいました。奈良、平安、鎌倉、室町そして江戸時代中頃になると、稲荷神を祀り、鈴の宮稲荷神社として、人々に尊信されてきました。

幕末元治元年（一八八四）、尊皇攘夷の旗印に、天狗党六〇余名が勢揃いして出発した由緒ある地でもあります。

詳しくは、ふるさとルネサンス会員、うちだしようぞう作（石岡物語、ふるさと一口再発見）を是非ご覧頂きます事をお薦めします。

現在、全国で活躍中の彫刻家鶴見修作先生が、

今から二〇年前に、東京から、自然を求めて、旧玉造町に移り住み、第一回の個展を香丸資料館で行ったことが縁で、金丸町内の活気ある元気なみなさんの積極的な呼びかけで神社の彫刻を担当なさったそうです。

実は、鶴見先生が、鈴の宮のおたふくちゃんの生みの親御さんでした。

物語 おたふくちゃんの一節に、
…この町に昔のような明るい笑顔が戻ってきてほしいと願い、ニッコリと笑った微笑み像を彫って神社に置いたのでした。
というところがあります。（この続きは、是非「鈴の宮のおたふくちゃん」をご愛読ください）

柴間 ギター文化館発

ことば座「常世の国の恋物語百」旅立ち公演

2007年2月18日（日曜日）
= 13:30 開場 14:00 開演 =
（料金：前売券 2500 円 当日券 3000 円）

愛すべきふるさとの風景の中に建つギター文化館を拠点に、小林幸枝と近藤治平が常世の国の風に吹かれて百の恋物語への旅に出発します。旅の始まりは、恋瀬の川の恋物語。

第一話「恋瀬川物語」

『あなた、私に百の恋をくださいますか。私は百の舞いにお返しいたします』
小林幸枝ならではの恋歌の舞を軸にした詩劇。恋を希求する女の内面を通して、自分にとってのふるさととは何かを問う旅立ちの物語。小林幸枝の魅力をそのまま恋瀬川に物語します。

第二話「古里は春の夢」

最も常陸の国らしい風景である船塚山古墳をモチーフに、「ありそうで無い」また「無さそうである」不思議の恋物語。手話と声話が互いに鏡を見るかのように展開して行く、全く新しい奇想天外な「一人は二人、そして二人は一人」劇。

（ことば座は、脚本家の近藤治平と豊俳優の小林幸枝が、常世の国の恋物語百の挑戦しようとして立ち上げた朗読舞劇団です。ふるさとの風景をモチーフに近藤治平が百の恋物語の創作を、小林幸枝が手話を基軸とした朗読舞に挑戦します）

ことば座 茨城県石岡市府中5 - 1 - 35
TEL 0299 - 24 - 2063 FAX 0299 - 23 - 0150

歴史のある神社から、すさんだ今の世に、微笑という灯を、みなさんの心にともそうと、たくさんの微笑みの像を彫り続けていらっしやる鶴見先生のおたふくちゃん、現在、神社にはおりません。

中町の久松商店カフェ・キーボーさんにとびつきのやさしい、ほほえみでみなさんのおい出をお待ちしています。

どうぞ歴史ある鈴の宮稲荷神社への初詣もご案内申し上げます。

私は、会報四号でお伝えした通り、天狗党六〇余名の一人、先祖を偲びながら、五歳と三歳の私達の孫を連れて、昨年の健康に過ごせたことに感謝し、未来ある孫達の幸せをお願いしてきました。

尚、「鈴の宮のおたふくちゃん」「石岡物語」「口再発見」の物語は、カフェ・キーボーさんにございます。

(参考資料) 平成八年、石岡の地名

平成八年、石岡の歴史と文化

あの少女のさげび

伊東「子

去年の二科展にみつ子は友や妹と出かけた。

会場内で二人とはぐれたのは、作品のひとつひとつをじっくりみるよりも、紹介されたものを早くみたいというおもいからだ。それは知り合いの陶芸家の作品で「何故」という題名がついていた。みつ子はその前で釘づけになって

しまった。

少女が戦死したいとしい人のなきがらを抱いてみつ子をみつめていた。

「何故」

「どうして」

「ねえ、教えて」

「なんで死んじゃったの」

「ねえ、ねえ……」

幼児のおもかげを残したあどけない顔が、口もとをふるわせながら問いかけてくる。少女のまわりにはバラバラになった手足がころがっている。「そうね！ むごいことね」答えてやったつもりで口を開いたみつ子だったが、答えになどなっているはずもない。

少女の背中には、火の粉が振りかかっている状態だが暑さなど感じていない様子だ。

「わたしね。さくらって言うの。この人の名前はわからないの。わたしが勝手に風の君って心の中でよんでいたのよ。

新しい年をむかえた日の夜、暗にまぎれて攻め寄せてきた集団に、両方の部落とも焼かれてしまったの。

自分の部落が焼けるのも気になったけど、わたしは北の谷のこの人が心配で走って来たの。でもこの人長の館の前でバラバラになっちゃったの。

「何故わかったかって……」それは腕輪よ。

ここに刻まれた桜の花よ。はじめて合った時目についたの。わたしの名前と同じ「さく

ら」だったから、それをたよりにずいぶんさがしたの。

「何故」

「なんでこんなことになっちゃったの」

なんて答えてやったらいいのかわからないみつ子は、少女にそおつとふれてやった。そして歩きだした。いっしょに来た友や妹のことなど気にもせず、ただいそぎ足で人の波の中をすぎ、なんの抵抗も感じないまま電車に乗っていた。車内ではあの少女のことが頭から離れなかった。それから霞ヶ浦の堤防に立って玉造の方へ心をはせながら、とおく千四、五百年の昔をしのんだ。涙が出た。涙はとまらなかった。はばかりなく泣いていた。何故涙が出てくるのかわからなかった。

この作品をつくった人は、玉造の陶芸家話しによると、「ここ何年か、大地の中からのさげび、うったえ、という表現に力を入れています」と聞いていたので、みつ子にも何か通じるものがあったのだと思う。

みつ子が湖面をみつめながら、たたずんでいたのは十分位だったかもしれない。その間に「さくら」にまつわるドラマを頭の中で綴っていた。

古くから浜辺に住んでいた人々の部落があった。さくらの祖父を長として漁をしたり畑を耕して生活していた村人の様子。

都から移り住んだ人々の文化や生活の異

なる部落があった。年老を亡くし若い長を中心に狩や開拓、稲づくりに励んでいた様子。

若者や少女たちの冒険を求めていく中で
の出会い。四季の美しさや恵みの豊かさ
の中で成長していく様子。

若いエネルギーのひき合いが、両部落の交
流をめぐみ、平和の力となっていく様子。

幸せをこわしていく争いが突然やってくる
無常さ。両部落のあとはどうなったのか。

風が落葉を運び枯葉が大地をおおい、雨が
土を流してうずもれてしまつて時が流れた。

今よみがえつた「さくら」のさけびを、どう
してやるつかと考えながら、みつ子は家に帰つ
た。その夜当然のことながら妹から「どつした
の。先帰っちゃつて。何かあつた」と電話があ
つた。いい加減ないいわけをして電話をきつた。
(あとで必ず訳を話すからね、と頭の中で思つ
たが、今日の自分の行動が自分でもわからない
のだ。時がたてばわかるかな)

みつ子は時々さくらに会いに行くことにして
いる。「何故」というさくらの問いに答えられな
くてもいい。ただ合意にいく。
そして語りかけてやるのです。

節目

近藤治平

「何か、お正月が来るって感じがしない」
ここ数年、いやもつと前からだろつ。そんな
言葉をよく耳にするようになった。

感じがしない、らしくない、とは時の節目な
どに伝わる行事のいろいろな場に言われる。し
かし、その口にする人達は、お正月だとかお盆
だとか、雛祭り、端午の節句、七夕、七五三、
さらにはクリスマスといった節目の行事に対し
てどんな尺度を持つてそう言つのだろつかと不
思議に思つてしまふ。

時の節目の多くの行事は、政治的、宗教的な
意味から来る祭り事であるが、それが暮らしの
中に長い時をかけて文化化されてきて、地域地
域の特性を持つて様式化されて伝えられてきた
ところが、近年、様式もバブル化、規格化して
きたと思つたら、経済の沈下とともに派手にな
つた様式も萎んで哀れな残骸だけが残つてしま
つた。

外見だけの様式が萎もつがどつしようがか
まわないのであるが、節目の心までもが萎んで
捨ててしまったのは困つたことだと思つ。

我が家の者も、正月を迎えるような雰囲気じ
やないし、そんな気分もないという。しかし、
正月をどう迎えるかというのは、心の問題で、
見た目を飾ることではない。松飾だつてしなく
てもいい。色々あつた一年を振り返り嫌なこと
をすす払いするように捨てて、迎える年にどん
な希望を紡いでいこうかと、考えることが大事

で、それがお正月を迎えるということだろつと
思つ。

大晦日の夜のこと、年越し蕎麦を食べるかい、
と家人に聞くと腹が一杯だからいらないう。
それではお正月を迎えるという気分は持てない
でしょう。私は、迎える年に希望を紡いでいき
たいから、一束の半分を茹で、ザル蕎麦にして、
大きく音を立てて啜り心の中に希望を願つた。

さて一夜明け、元日の朝日新聞の元日特集版
に、脳の話が載つていた。その中の一つに「愛
するつて何？」の項があり、人間が直感的に誰
かを好きになつたとき、その理由を説明できな
くても不思議はないとあつた。ここでは「好き」
を愛として説明してあつたが、この場合は「恋」
とするほうが正確に思つが、恋も拡大解釈をす
れば愛といえなないので反論するのは止めて
おこつ。

ここにも書かれていたが、動物における原始
的な生存欲求の判断の基準というのは「快」「不
快」である。快・不快をこの記事では「好き」
「嫌い」と置き換えてあつたが、心理学的には
「快」「不快」が定説になつていたように思つ。
好きの原点というのは「快」であり、こころよ
い(快い)快(から好きになる)のであり、不快
だから嫌いになるのだろつと思つ。

自然界における生存本能からみると「快」と
は「安全」を意味し、「不快」とは「危険」を意
味する。そうすると矢張り「安全」という快(だ
から無防備状態と言える好きが生まれる)と考え

る方が自然といえる。

少し前になるが、この紙面で愛情物語を書くのは御免で、恋物語ならば書く、と誌したことがあったと思う。人間の情動（喜怒哀楽などの感情の変化）中で、他の動物にはない最も人間らしい情動が恋だということが出来る。

現代の人間に進化するに最も大きく貢献したのが二足歩行だといわれている。二足歩行をすることによって、人の声帯は喉の奥に位置するようになつて大きくなり、複雑な音声をもてるようになり、音声言語が生まれたのである。この音声言語によって様々な情報の交換が可能となり、文字言語も生まれてきたのである。その意味では、二足歩行こそが人間の進化の源泉といえる。

一方、情動という側面で人間を見たときに、最も人間らしい情動が恋だといえる。これは私の勝手な推測であるが、人間にしか持たない姑息さというのは、恋を源泉として誕生したのではないかと考えている。

動物には姑息という概念はないのだからと思う。動物の行動の中で姑息と思える行動を見ることが出来るが、これは姑息な人間が、自分に照らして勝手に姑息と思い込んでいるに過ぎず、彼らには生きるための「快」「不快」の選択に過ぎないのだからと思う。

恋という我儘で不思議な感情の変化が、人間に葛藤という厄介でまた楽しい心模様を作り出したのだからと思う。恋というものが不思議な厄介であることから、あらゆる物語の中に直接

か間接かは別にして必ず存在しているのである。物語というのは、ドラマであり、ドラマとは人間の葛藤とその先にある希望とを表現したものであることから、物語とは恋だと断言したとしても頓珍漢な答えとはいえないだろうと思う。私自身を振り返ると、物心ついてからというもの恋のしつぱなしだったと言つてもよいだろう。勿論、今だつていつも恋をしている。だから何時だつて希望を捨てることはない。尤も、

ふるさとルネサンス文庫

うちだしょうぞう作品

「悪僧記」「花は咲けども」「志筑八千五百石」「玉里村幻影」「石岡ふるさと再発見」「歴史なき歴史の里の歴史譚」「曾我兄弟と大掾氏」「蛇の神と耳の神」「戦乱」「夢彦物語」「まほろばの里」「古代の面影」「衰亡の谷」「天蚕天馬（絹の道）」「茨城の里」

近藤治平作品

「新鈴が池物語（新鈴が池物語・潮の道・霞ヶ浦の紅い鯨・金丸わはは通り）」「皇帝ペンギンの首飾り」「新説柏原池物語」「風に吹かれて一行に眩く」

兼平智恵子作品

「日々の移ろいのなかに」「ふるさとの風に吹いて（近藤治平共著）」

大湖千恵作品

「鈴の宮のおたふくちゃん（鈴の宮のおたふくちゃん・龍神山恋物語・千代姫物語・丁子屋染物店に守られた母子）」

恋をしなくても希望は紡げるのだが、私は恋の渦中になら希望はいやだ、と勝手に決めつけ、せつせと恋を求めてうつろっている。

そう、私にとって節目の心とは、もしかしたら恋の心なのかもしれない。だから何の飾りも、特別な料理を作らなくても、お正月を祝い恋する君を想うのだから。

私にとって節目の心とは恋の心であるとするれば、今年も大層に忙しいことだ。毎月のように節目の行事がひしめいているのだから。健康に生きていくことに感謝して元日。

編集後記

新春号ということ、何時もより多い頁数となりました。事務局としては嬉しい悲鳴です。毎号のように新しい方から励まし、応援の言葉を頂き心強く思っております。次号からは新しく、一行詩のコーナーなど設けて紙面の充実を図っていきたくと考えております。

編集事務局

〒315 0001
石岡市石岡13979 2
0299 24 2063
(白井啓治方)